

銅鑼造りの名工・魚住爲楽

〔 1 〕

木 村 弘 道

家 系

序

魚住爲楽は、明治19年12月20日に魚住伊之松の長男として生れた。本名を安太郎といい「爲楽」はその号である。

鑄金家で銅鑼造りの名工と称され有名であったが、昭和39年7月15日に胃ガンで歿した。

生前は名人気質の奇人ともいわれ、また大変な酒豪で逸話も多い。

しかし、まだまとまった伝記もなく、歿後ようやくその資料は散逸しつつあり、特に爲楽翁自筆の「銅鑼製作法」の原稿が紛失してしまったことは惜しい。

本稿は、魚住家の御遺族をはじめ、北国新聞社の米田敏氏や「爲楽」と直接親交のあった人達の御厚意と御援助によりまとめたものであるが、魚住爲楽の実際に生きた姿をするため、できるだけ逸話や思い出話も集録することにした。

なお、本稿は「爲楽」を号する以前の安太郎時代の紹介であるので、以下は本名の安太郎を用いることにした。

資 料

魚住安太郎の研究資料の主なものには次のようなものがある。

1、100数10点と推定されている銅鑼をはじめとする多数の遺作品。

1、小松市役所や金沢市役所に保管の除籍の原本。

1、北国新聞に昭和39年7月から10月にかけて連載された「魚住爲楽ききがき抄」

1、正木直彦著「十三松堂日記」

1、魚住家所蔵のスクラップ・ブック。

1、安太郎の遺族や親交のあった人たちがつづった思い出話の原稿や談話。

1、展覧会の目録や賞状等である。

魚住安太郎は明治19年12月20日に、父の魚住伊之松と、母の「なを」の長男として生れた。

いま、安太郎を中心に小松市役所および金沢市役所の除籍の原本により、魚住家の家系を紹介すれば次のようである。

〔曾祖父〕・「又四郎」

〔曾祖母〕・「ひな」 又四郎妻、文化5年12月朔日生

石川県能美郡小松中町浅井屋善平亡長女入籍
明治22年1月19日死亡

〔祖父〕・「理助」 又四郎長男、天保6年11月3日生

明治26年11月24日死亡

〔祖母〕・名不詳

〔父〕・「伊之松」 理助長男、萬延元年9月6日生

明治14年3月28日父理助隠居ニ付相續

明治39年3月8日能美郡小松町字大文字町103番地ヨリ金沢市堅町84番地へ轉籍

明治40年9月10日本籍地変更

明治43年11月9日本籍地変更

大正2年10月23日味噌蔵町裏丁12番地へ本籍地変更

大正3年1月22日尾張町30番地へ本籍地変更

大正3年12月28日味噌蔵町下中丁78番地ノ2へ本籍地変更

大正6年3月6日南町74番地ノ1ノ3合併
74番地の7ニ轉籍

大正9年10月12日長町5番丁64番地ニ轉籍

大正13年5月21日本籍ニ於テ死亡

〔母〕・「なを」 萬延元年6月17日生

明治17年10月23日石川県金沢區大衆免中通中山宗助亡長女入籍

明治45年3月6日（推定）死亡

〔安太郎の兄弟〕 戸籍によれば次の三男五女である。

長女・「かね」 明治 18年 3月10日生

長男・「安太郎」 明治 19年12月20日生

二女・「寿々」 明治 22年 9月10日生

二男・「又吉」 明治 25年 3月25日生

三女・「とみ」 明治 27年 9月21日生

三男・「三郎」 明治 29年10月25日生

四女・「ユキ」 明治 31年 5月25日生

五女・「満つ」 明治 34年 3月25日生

〔安太郎の家庭〕 安太郎の妻は戸籍には先妻の「とめ」と後妻の「とく」の二人が記載されている。

「とめ」 明治26年 8月16日生 井ノ口角助

「はる」二女

大正 9 年 6 月 2 日滋賀県高島郡青柳村大字下小川88番屋敷戸主井ノ口角太郎妹魚住安太郎ト婚姻届出同日入籍

大正10年 1 月 27日協議離婚届出同年 2 月 9 日入籍通知ニ因り除籍

「とく」 明治26年10月 1 日生 堀部隆「八重枝」六女

大正 14 年 3 月 9 日金沢市十三間町 72 番地

戸主堀部八重枝六女魚住安太郎ト婚姻届出同日入籍

昭和39年 2 月 26日金沢市長町 5 番丁 64 番地 14 で死亡

以上であるが、安太郎は先妻の「とめ」について「爲楽ききがき抄」で次のように語っている。

『大阪で修業しているとき、小松の父から「だれか、いいのを連れてこんかい」と激励(?)され、親方の山口徳蔵氏に相談して近所の家に奉公していた娘を嫁にした。

父に引き合わせ、いっしょに生活してみるとだんだんぐあいが悪くなってきた。女房は力が強く、実によく働くが、残念ながら礼儀作法にうとく、上品がる父とことごとくに意見が対立してしまう。私の持論は古いかもしれないが、“女房のかけがえはあるが、親のかけがえはない”である。親の意見に合わない女房は離別するほか仕方がなかった。わたしはできる限りのことをしたいと借金をかさねてどうにか、コウリ 2 つ分の荷物を持たせて帰

すことができた。』

また、後妻の「とく」については、次のように語っている。

『相変わらず飲み歩き、借金し歩いているうち友人が、かわりをももらわんかという。「うん」というわけで山錦楼（金沢市蛤坂）の女中をしていた“おきんちゃん”と見合いをすることになった。ところがその美人のおきんちゃんは、私の年かっこう、頭のはげぐあい(?)からか「いやや」とあっさりソデにしてしまった。

おもしろくなく家にいると、同じ山錦楼の女中頭をしていた女が「ちょっと合いたい」と1人で人力車で乗りつけてきた。先日、おきんちゃんとの見合いの席にいた女である。

「あんたさえよかったら、内助したい」という申込み。「親類は反対しているが母親だけが、お前が見込んだ人なら」と許してくれるとまでいう。

私の父はこの話を聞いても「そういう押し入り女はきらいだ」といったが、私と妹は、借金のある家へきてくれるという入なんかいないと説き伏せた。

「9 尺 2 間の長屋で生涯暮らす覚悟ができていくか。仕事に頭を使うと時には徹底的に遊び、女性問題もおきるだろうが、いいか。そのかわり、自分はなんでもお前には打ち明けるし、女に家をもたすなどということは絶対しない。それでよろしいか」と念を押し「そのかわりむこう 3 年の間に、一生食べるだけのものは残すから」とみえを切った。

女房は 500 円の金をさし出したが、わたしとて家が建てたかったので、ノドから手の出るほどほしい金だったが「お前の金で家を建てるなどしたら一生頭があらぬからいやだ。どうしてもというのなら借りてやろう」とたいそうな、たんかをきって借りうけた。しかし、同時にすぐ女房の名義で 3 年間で 500 円の“不動貯金”に加入し、月 13 円 50 銭ずつ貯金することにした。“いちがい者の意地”でもあった。

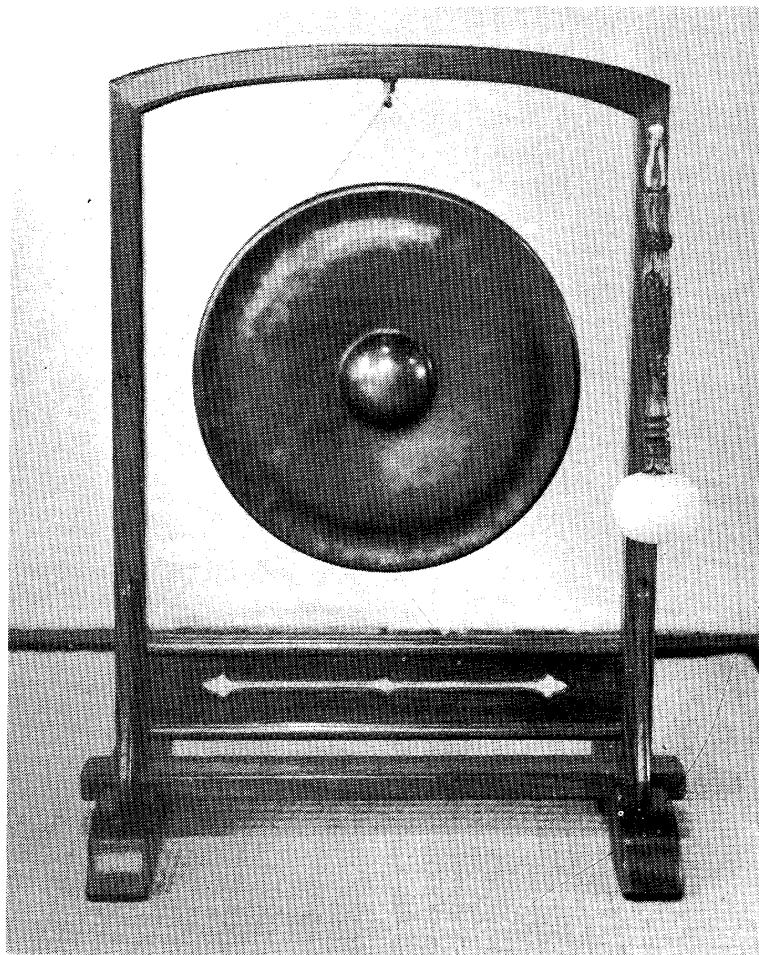
女房はがまん強い、よくできた女であった。女のことでは女房に苦勞をかけたが手切れ金はいつも女房が持って行き、ついでに、その女と女房が、うまが合って友人同士になるということもあった。



製作中の魚住安太郎(為楽)



晩年の魚住安太郎夫妻



1尺の銅鑼



鈴

「おとうさんの服のポケットには1度も手を入れたことがない」といい、私が“市中旅行”と称して1週間でも10日でも家を留守にして飲んでいても自分からは一度も電話をかけてきたことがない。シンの強い女だった。

39年2月「あんたあ」とよくわたしを呼んだ。「さびしゅうてたまらん」とって私の顔をじっとみていたが、それから数日して死んでいった。』

以上は魚住安太郎が妻の思い出話であるが、安太郎と「とく」が結婚したのは、先妻と離婚後間も無いころと思われるが、入籍したのは大分後の大正14年3月である。

〔安太郎の子孫〕 安太郎には子がなかったので、乙丸孫太郎と「ひさ」の三男「幸兵」を養子にもらい、孫が3人あった。

「幸兵」・明治42年9月23日生 昭和11年5月18日金沢市高岡町上藪ノ内27番地戸主乙丸喜二弟魚住安太郎同人妻とくト養子縁組届出入籍

昭和12年9月13日金沢市千日町55番地戸主寺井喜太郎三女寺井アヤ大正4年7月17日生ト婚姻届出同日入籍

昭和19年10月26日バシー海峡方面ニ於テ戦死

〔孫〕 「安彦」・昭和12年11月7日生

「茂子」・昭和14年9月27日生

「幸雄」・昭和16年8月7日生

略 歴

明治19年12月20日 小松市大文字町、3代続いた桶職魚住伊之松の長男として生れ、少年時代はあばれん坊として勇名をはせる。

明治30年3月 小松市芦城尋常小学校卒業。後家業の桶職に従事する。家職で覚えたやり鉋の技術は、のちに法隆寺夢殿の大修理の際に役立つことになるが、当時の思い出を「ききがき抄」は『からだの弱い父を助けて、家業のオケ屋の職人の中で暮らすうちに、わたしは14歳でもうりっぱな一人前の職人だった。人には負けられないという根性と、何をするにもからだを惜んではならないというのが、私の信念だった。だから人が1

時間で覚えるものは半分の30分、いや、一生懸命にさえすれば10分ぐらいでも覚えたものだった。

一度、頭の中へ入れてしまえばそれで自分のものである。ぐずぐずと、頭の中へ出したり入れたりおもちゃのようにもてあそんでいると覚え込んだものでも忘れたり記憶違いをしてしまう。

その点、私は一度覚え込んだものは、しゃっきりと記憶の細胞へ閉じ込めて、よけいなことは思わない。それで結構、用のあるときには思い出すものである。

こうして私の頭の中はいつも、からっぽ。それゆえに、他の職人よりも、覚えは早く、むずかしい仕事もすぐのみこめた。

あるとき栗津の北森という酒屋から、新しい仕込みオケを3本作るようにと注文があった。父は、自分の代理として私に、いいつけた。職人を連れて北森家へ行くと、その主人は「おとっあんはどうした。あんたのようなアンマがきても仕事ができん」という。職人たちは日ごろ、私の腕を知っているのだから「若いアンマやけど、まあ、まかせまっし」と折り紙をつけてくれる。職人たちは日ごろは“若いくせに”と腹の中で敵視していても、いざとなるとかばってくれた。半信半疑の主人にかまわず、3本のオケはりっぱに完成した。新酒を仕込むオケは、酒の出来を左右するほど重大な役目をする。小さな手違いがあっても、そこからしみ込むカビは酒の味を変えてしまうのである。

1カ月以上たつと北森の主人はニコニコとやってきた。「若い棟領やが、けっこうやるな」といって、これで飲んでくれ、と2円もくれたことだった。

明治36,7ごろ、不況の影響を受けて家業は不振となる。

明治37年秋、家業に見切をつけ、大阪へ家出する。この家出は名工「爲楽」誕生への陣痛だった。皮革会社にしばらく働くが間もなくやめ、久保田鉄工所へはいる。しかし、仕事が単調なため、ここもしばらくでやめ、仏具金物製造所山口屋へ転職。このころから唐砂張りのおりんの研究をはじめた。安太郎は当時を回顧して「家運が傾くのは、果実の熟れ落ちるより早い。19歳の秋、

広さを誇った家も土蔵も、人手に渡さねばならなかった。父のかい性のなさをうらみ立腹した私は、家の金5円を失敬して家出してしまった。あてはなかったが、とにかく大阪へ出た。5円もっているから少々気は大きい。活動をみたり、心斎橋筋をみたりして2、3日遊んだが、限りある金すぐなくなってしまった。どこかへ奉公したいと口入れ屋へ行ったが、「身元保証人がなければだめだ」と断われ、ついに千日前の交番所へ飛び込んだ。その折りの山本巡查という方が、たいへんよくしてくれ、小松へ身元を紹介して、私の話を信用し、大倉組という、陸・海軍省へくつやバンドを納めているところへ世話をしてくれた。仕事はたいへん単純なものだった。満州から牛皮がどんと送られてくる。その堅くてパンパンになったのを1週間ぐらい石灰につけておくと毛がとれてきれいになる。それを魚油とロウと蒸気でバラしたり、厚いものは金剛砂でみがいてバンドにして、温室で乾燥する。しかし1時間働いて2銭8厘しかもらえぬ。しかも仕事は毎日、同じことをくり返すばかり。これが一人前の男のすることかーとばかりかしくてたまらない。不平をいうと「お前は、年少だから、おもしろい仕事はまだだ。辛抱せよ」といわれるだけだった。

しかし、どうしてもいやだったので久保田鉄工所へはいった。わたしが、すぐに仕事を覚えてしまうので、同僚に憎まれ、熱湯をかけられ、気絶するという事件までおこったが、どうにか生命はとりとめた。こんなことでこの鉄工所もやめたかった。ウロウロと町を歩いていると高津8番丁で「仏具鋳物工見習募集」の広告が目に入った。私は元来、信心深い家で育ち、幼小時代の遊び場所もほとんど寺の境内だった。仏と聞くと文句なしに身内のしまるのを覚えたものだった。そこでひとつ苦労してみようーすぐ決心し、その足で仏具師山口徳蔵方へ弟子入りした。

ところが、やはり、ろくろを回すだけのあほらしい仕事ばかり。なんのことはない私は動力がわりにやとわれたもんだ。3日間、辛抱したが、どうも辛抱しきれず、ふろしき包みを持って山口方を出てしまった。行くあてもない。かといって小松の父のもとへ帰るわけにもいかない。思いなお

して山口方へもどっていった。

気持ちを入れかえると、どんどん仕事はおもしろくなる。2カ月もたつと、自分ではもう主人と同じ腕前だと思えるようになったが、なかなか主人は片腕にもみとめてくれなかった。「人が鼻の頭をまっ黒にしてがんばっているのに」と思うと情けなくて、とうとうストライキをしてしまった。

主人は「しかたのないやつだ。おれが作るものと同じものを作ってみよ。何個できるか。おれの半分できたら、座をゆずってやってもいいわい」という。さあこうなればしめたものだ。小僧に、ひとひねりのそでの下を渡して、万事仕事の手順がスムーズにいくようにさせた。仏壇の中の、オケの形をした線香立てをつくるのだった。主人はそれを1日120個つくる腕をもっている。私は夜があけるやいなや仕事場へ飛び飛び、腕の折れるまでやってようやく64個しあげた。

私は主人運がよかった。主人は「人間は根性ひとつで目の色が変わる」とよくいい、私の仕事ぶりをほめてくれたが、そのため、同僚からはいつもそねまれたもんだ。

しかしこの店も、日露戦争後の不景気風にあおられ、たたまねばならなかった。私はまた久保田鉄工所へ変わったが、4カ月後には、また仏具の道へ舞い戻ることになった。しかし仏具で独立しようとするとは必ず主人の山口とかたき同士になってしまう。そこで私は仏具の中でも砂張りのおりんに目をつけた。そこで山口方にいながら、おりんの研究をはじめた。毎夜、やってみるんだが、うまくいかない。そのうち、私にあだ名がついた“フジュー”というのである。

銅と湯を調合し鋳物にして600度ぐらいに焼き水に入れると“フジュー”という音がして白煙があがる。失敗して穴があくと“穴かしこ”などとはやしたてる。意地っ張りだから、ひそかに京都の腕のいい唐砂張りの職人に話を聞いたりして、そこそこのものができあがるようになった。毎夜、研究しているのを職人たちが「もの好きな」という調子でのぞいている。私はそれが、しゃくにさわるやら、おかしいやらで、意趣返しに作業工程で一度は鳴らなく^{な3}おりんをわざとたたかせる。

「鳴らんじゃないか」涼しい顔で「そうかなあ」

と答える私。いよいよ、それを焼き入れすると、いい音が出る。それが本音というもの。近所の鋳物師のトラさんなどという職人までのぞきにきていて、驚いて逃げていく。

さて、このおりんが、売りものになるかどうか。主人は「いくらにするか」「5円」―「そりゃ、あんまりや、原価は75銭か1円や」「技術料だからかまわん、かまわん」

主人はまず試みにと、こうりにつめて、かついで売りに出かけた。5円とはいったものの、私も売れるかどうか胸を痛めて主人の、足音に耳をすましていた。3時間あまり―あき裏ぞうりのチャリンチャリンという音で主人が帰ってきた。「4円70銭で売れたぞ」

さあ、これをきっかけに、どんどん作りはじめた。9カ月間休みなしに作って400円たまったがその金はみんな飲んでしまった。私は金をもつことがこわい。』

ここにでてくる砂張りのおりんに目をつけ、その研究作製にかかったのは、明治40年安太郎22歳のころでなかったかと思われる。それで、安太郎はこの記念すべき年で過去の自分と句切りをつける意味からか、後年、文展に入選したときの新聞の談話等では、22歳まで桶職といっている。

明治42年ごろ、唐砂張りに成功し、一旦帰郷したが、うまくゆかず暫くして、再び大阪の山口方に帰った。しかし、銅鑼の研究をはじめたのもこのころからといわれる。

当時の状況を安太郎は『大阪の山口徳茂方でどうにかおりんで生きていく目鼻がついたのが家出てきて5年目だった。とにかく一度小松へ帰るハラをきめた。

金沢市長町に家を借り、父と2人で、人手を借りず背戸に粗末な工場を建て、そこでおりんを作ってはこわし、こわしては作ってみたが、なにしろ、多くの家族をかかえながらでお金がつづかない。近所から50円、どうにか借りてやつているうちに、自分ではどこへ出してもいいと思えるものができたが、ちょうど大戦後の大恐怖は、私らのうえにも押しよせ、不況の世では1個15円のおりんはなかなか売れなかった。米が1升11銭

であった。このままではなんとしてもくやしいと、父に「もう3年ひまをくれ。その間は死んだものと思ってくれ。31歳には必ず、りっぱなみやげを持って帰るから」と頼み、ふたたび大阪へ出た。折りしも母は病床にあり、7人きょうだい達は、病弱な父を頼りに細々と生きていかねばならず、「安マ安マ」と私をひきとめる母のたよりげな声をあとにする私の心は重く「おっかさん、かんにんやぞ」といいながらも泣けてしかたがなかった。しかし自分としてはやらねばならないのだ。

大阪の山口方も、ご多分にもれず不況だった。職人はみな暇をとって散っていったあとだった。

私は「唐砂張りに成功した」と大声で近所一帯に吹聴し歩いたので、なんとなく私のことはうわさとして広まっていったようだが実際には金がない。しかし、よくしたもので銅やスズを商う人がやってきて「なんぼならできる」と聞く。「100円」「そうか。うまくいったら返せや」

どうかこうかやっているうちにひまができた。ある日、三休橋の近くの金菊という道具屋の店先に1尺6寸の鉦があった。たたいてみるとかなりいい音がする。200円という値段がついていたが、私は山口方の魚住というものだが、その鉦を借してほしいと頼みこんだ。鉦に心ひかれ作ってみたいという意欲がでてきたのだ。一面識もない主人は、よく話を聞いてくれて借してくれた。

毎夜、鉦をとりだしては研究してみるのだが、相はできても思うようないい音がでない。借りたままで約半年すぎてしまった。「ええままよ。200円という金額がでているのだから」と、とうとう借りた鉦を割ってしまったのだ。割って各部分の厚さを入念に調べてみた。

その後まぐれ当りのように1尺2寸の、どうやら聞けるようなものができあがったので、さっそく先の道具屋へもっていった。「実は、借りた鉦をやむにやまれず打ちくだいてしまった。おわびにこの鉦をあずかってほしい。金は月払いで必ず返すから」とあやまったところ、主人は快く許してくれ、20円の炭代まで出してくれ「もっといいものを作りなさい」と激励してくれた。感激した私は必死に打ちまくり、つぎにできあがった鉦を再び持っていったところ、主人は「こんどのは

だめや、いらん」とあっさりいい放った。出鼻をくじかれた私の額に、ミミズのように血管がふくれあがるのが自分でもわかった。

「えいっ」その鉦を持ちあげるやいなや庭先のちょうずばちめがけてなげつけ、砕いてしまった。

「なんという短気なことをする。その調子じゃお前もたいしたことはないわい。もう家へは出入してくれるな」こんどは主人が怒りだした。

はっとわれにかえった私は、その場に両手をつき、主人にあやまった。そして「何年かあとには必ずりっぱなものを作ってみせる」主人にも自分自身にも堅く誓ったものだった。

そのころ、金に困った私は夜だけ人力車を10銭で借り、車夫となって資金をかせいだもんだが人の心に触れるいろんなことを体験した』と回想している。

大正6年 金沢で銅鑼の製作をはじめた。

しかし、これからの数年は誠に苦難の時代で、高岡町上藪ノ内の医師・留田英夫氏は「大正6年ころ、魚住安太郎の近所に友人がいて、私はたびたびそこへ遊びに行ったが、その折、ときどき安太郎の仕事場をのぞいてみたことがある。当時の安太郎は、もっぱら仏壇のおりんを作っていた。そして、完成したおりんを一つ一つ掌にのせ、たたいて音を試し、気に入らぬおりんは、その場でたたき壊していた。合格品は少く、不合格で壊したおりんが山の様になっていた。そのころ私は、魚住の銅鑼のことは知らなかったが、魚住のおりんは“外のと音が違う”という評判は、すでに聞いた」と語っている。

昭和10年5月24日 初めて美術院長・東京美術学校長の正木直彦氏にあい正木氏に見い出される。すなわち、昨23日工芸奨励会の鑑審査のため正木直彦が島田佳揆・板谷波山・香取秀真・六角紫水の諸氏を同行し、来沢したのを機会に翌24日山川孝次に紹介され、以後、正木氏との交際は、ながく続き正木直彦の日記「十三松堂日記」に、たびたび安太郎の名が出てくる。

昭和10年5月24日 晴 山川孝次 魚住安太郎（長町五番町64）を拉し来る 魚住は隠れたる砂張金工の名人なり 銅鑼砂張建水リンを携示す 甚精巧なり 尺2銅鑼1を注文す（十三松堂

日記）

なお、このとき板谷波山は銅鑼を、香取秀直は青海盆を、清水亀蔵は建水をそれぞれ買い取ったという。

昭和10年10月4日 金沢の山川孝次~~孝次~~銅鑼師魚住安太郎を帯同して兼約の尺2銅鑼を携来る上々の出来なり（十三松堂日記）

昭和11年2月24日 第1回帝展に1尺2寸の銅鑼を出品し入選す。

賞 状

金属 魚住安太郎

右本会ノ趣旨ニ副ヒ克ク精励研鑽第1回帝展ニ入選セリ於テ其喜ヲ頒チ茲ニ記念品ヲ贈リ之ヲ奨称ス

昭和11年2月24日

金沢市意匠図案研究会長

金沢市長工学博士 片岡 安

当時の新聞にも大きくあつかわれ、次のように報道している。

北陸毎日新聞の昭和11年2月20日の号外は「初めて出品し初めて入選、苦闘酬ひられ新入選の魚住さんは語る」という見出しで、『苦闘28年今酬ひられて初入選に輝く金沢市長町附番丁64魚住安太郎(51)さんを訪へば喜びに溢るゝ面を輝かせ乍ら語る。

出品は尺2寸の茶席用鉦鑼で昨年10月から正月匆匆まで苦心して製作しました。23年まで桶屋を業とし、それから36の年まで鉄道往生もしようと思つた程苦労しました。36の年から現在まで師匠とてもなく殆んど独立独歩で朝鮮古代の砂張りを業としてゐますが、出品の鉦鑼は趣味として作ったもの帝展へ初めて出品して初めて入選し、苦しかった昔を思い感慨無量なものがあります。私は益田鈍翁さんから尺8の鉦鑼を注文されていますが、これこそ私一生一代の心血を注いでいるもの、この鉦鑼が出来あがれば私は死んでもいとひません。えゝあの鉦鑼は自信はありました。

家庭は夫人とく(44)さんと2人きりで喜びにあふれてゐた。』

また、魚住家に保存されている当時の新聞の切抜きには「擧れの銅鑼」と題して『“銅鑼の帝展

入選”といふ帝展最初の快舉が金沢の作家によってなされた。

この出品者は金沢市長町5番丁鑄金家魚住安太郎氏(51)で、さる11日直径1尺2寸の銅鑪が帝展に搬入された時はならびある会員はこの珍しい作品にまづおどろきの目をみはると同時に打つてみて漂渺たる妙音に「稀代の名作」とすでに折紙をつけ4部会員香取秀真すら「これだけのものを作るものは帝展会員でもない」とほめたといふ。

この日本唯一の銅鑪の名工魚住氏は桶屋に生れたが鳴り物に対する趣味が昂じ三味線や琵琶まで自作しのち仏具を製作してゐるうち銅鑪を研究したもので同氏は語る。

銅鑪の製作に苦心して25年全く独りで音響の研究から合金の按配、鑄造の秘訣まで寝食を忘れてやって来ました。今後一層精進して昔からの名物に劣らぬ名品を残したいと念願してゐます。なお、もう一枚の新聞には「丸型砂張を出品せる金沢市長町魚住安太郎氏は、今度が初出品初入選の躍進で二重の喜びに充ち発表の19日夜は近所の人達がお喜びに殺到といふ目出たさである。出品作品の鉦鑪はその音色一打1里4方にこだますといふ同氏苦心の力作である。同氏は22歳まで桶職であったのを時世を達観して断然仏具職に転向し大阪に出で、刻苦精励よく今日の榮譽を担ふまで精進せる一風変った自力独行の上で、家庭は夫人とぶ子さんとの2人暮しである、同氏は語る。

入選は音色によつたものと思つてゐます。作品は直径1尺2寸、重さ800匁ですが、目下三井の益田鈍翁から1尺8寸のものを注文されており、これはその大きさもですがそれよりも今度のもの以上のものを仕上げようと思つてゐます。』

これらの記事によって、入選作品がいかに好評であつたか、また安太郎の喜ぶ様子がよくわかる。しかし、それより注目されるのは、帝展の入選発以前、すでに益田鈍翁から、安太郎が思い出の大作である1尺8寸の銅鑪の注文を受けていたことである。

昭和11年10月5日 魚住安太郎金沢より来
文展出品物内見の爲也 砂張の水指 砂張の火筋
を見せたり 水指は鑄成の上に焼を入れて筋を立てるなり 内部に鉄砂点々とあり 是は金砂を混

し漆にて練付けたるなりといへり (十三松堂日記)

昭和11年10月 文展に砂張火箸入選す。

しかし、これ以後安太郎は中央の文展等の展覧会には出品しなかつた。それは、正木直彦より、「君は展覧会に出品せず、野人でいた方がよい」といわれ、その言に従つたためである。

昭和11年12月20日 5度も失敗した大作1尺8寸の銅鑪の鑄出に成功。

安太郎は苦しかった當時を回想して次のようにいつてゐる。

『美術院長・東京美術学校長の正木直彦氏をとおして三井家の大番頭益田孝男爵(号 鈍翁)から1尺8寸の銅鑪をつくるようにとの注文を受けたのは昭和11年のことだつた。

當時、2月の帝展に出品した銅鑪が初入選し、また10月の文展には砂張りの火箸が入選したよろこびのあとでもあつた。

尺5寸までのものは経験があつたが、尺8寸というのははじめてのものだつた。さっそく原型にかかり、念を入れてロウ型を作り、年内に鑄出しにかかつたが失敗、5回までも失敗してしまつた。

鑄込むには1度に鑄型を2個ずつ製作するので、人件費や材料費など貧窮の身にとってはばく大な痛手だつた。

事情を知らぬ正木氏からは「鈍翁は90歳の高齢だからできるだけ早くつくるよう」と催促があり困りはてた。しかし「この銅鑪だけは—」と心にきめ、もし6度目に失敗することがあれば、自分の力にも限界がきたとして自決する覚悟でもあり、人にもそう告げて決心してゐた。

苦心をかさねてゐる折、正木氏の喜寿の祝いが工芸家および県の有志で、金沢市古寺町の北間楼で開かれた。席上、私の隣席にいた某工芸家が「魚住君、君はまだ生きていたのかね。」とあざけるように云つたものだ。負けずぎらいで、こどものころから「ゲマタ(魚又)の安さん」でとつてゐる暴れものの私の心中の無念さ。その夜から、すぐ全精力をあげて鑄型の完成にとり組んだ。』

ところで、上記の談話で正木氏云々には一寸問題がある。

この話は、よほどながく期間をとつても、昭和

11年10月から同年暮までの出来ごとでなければならぬことは話のすじから明らかであるが、正木直彦は文久2年生れなので、昭和11年は75歳になり、喜寿の祝というのはおかしい。安太郎の思い違いであろう。

また、正木直彦はたしかに同年11月19日に来沢し、十三松堂日記には「…午後7時より富士久にて催されたる県下工芸家懇親会に赴き歓迎を受く、此日来会者60幾人盛会なりし」と記されており、安太郎も勿論この会には出席したと思われるが、その外にはこれと思われるような宴会は、どうも十三松堂日記にも見あたらない。

したがって、北間楼云々は富士久のあやまりで、他の話と混同したのであろう。

しかし、話の全体の流れはまちがいないと思われる、安太郎は11月19日の富士久の懇親会から帰り、その夜から鑄型の作製にかかったのではなかろうか。

「やがて思いどおりの鑄型ができあがったので12月20日、鑄出しに決めた。その日はちょうど私の誕生日でもあった。妻は私の強い決心を直感的に知ったのか、毎日、真夜中になると長町の自宅から千日町の雨宝院まで神もうでをつづけていたようだった。

12月19日。夜10時から火入れにかかったが、その前に妻にあてた手紙（遺書）をしたため、万一の場合のために薬局で仕事用と称して青酸カリを求めた。

午後10時に火入れし、無我のうちに翌20日午後3時、鑄出しを終えた。

はたして満足の結果がえられるだろうか。それとも6度連続の失敗に終わるだろうか。

鑄型の冷えるまで、じっと立ちつくしたまま。その間の胸中のあせり、今にも型を打ち割りたい衝動を押えるのが精いっぱいだった。4時半ごろ鑄型を打ち割った。

「おっ」一張りつめた気のゆるみでへたへたとその場にすわり込んでしまった。みごとにできばえであった。家内一同もオイオイと泣くばかり。やがて一同でお神酒を分けあって、心からの祝杯をあげ、汚れた姿のまま帰ってしまった。

銅鑪はそれから熱処理にかかり、焼き入れを行

なうとはじめて音を出す。銅鑪の生命はその音色にある。その昔20歳のころ大阪で奉公し、はじめて仏壇の中のオリンの音の美しさに魅せられて以来この道にはいった自分である。あれを思いこれを思いしながら胸をわくわくさせてバチをにぎりしめる。

大のバチでひと打ち一。銅鑪は作業場の空気を振るわせ、さびた美しい音色を響かすこと1分16秒。銅鑪音の新記録であった。

自信満々の私は、なおも多くの人の批判を聞きたいものだと考えて、金沢市の東南の丘陵にある大乘寺へ茶人の野村明庵、友人の小松砂丘の両氏を招いて試打した。

私自身は寺から遠く離れた谷間でその音に聞き入った。

「形も音も罪の打ちどころがない」と折り紙をつけれ、心中の得意は絶頂に達した』

昭和11年12月25日 朝早く加賀の魚住安太郎訪ひ来りて大銅鑪上々吉に出来ました 5度目に出来るので此分失敗すれば自決の覚悟で掛りましたら有かた上々の出来て打込みも已に済み打鳴も試みたるに1分以上の引きかかり 先以未曾有の出来と自信する唯時候柄仕上りに手間取る爲に年内には上納六ヶ敷夫故是丈の御便迄に参りたいといふ。正月20日迄には完成の筈なれば其話を益田鈍翁大人に報告し呉れといふ 即手紙を以て此趣を知らせ遺る。（十三松堂日記）

昭和12年1月24日 安太郎は苦心に苦心を重ねて完成した1尺8寸の銅鑪を持って上京す。

昭和12年1月25日 朝加賀の魚住安太郎かねて益田鈍翁注文の尺8の大銅鑪出来にて持参せり（十三松堂日記）

昭和12年1月27日 午前10時半東京駅発にて魚住安太郎に大銅鑪を携へしめて小田原益田邸に赴く 正午過着 鈍翁出て迎へて丁重なる午餐の享ありてやかて広間に移りて大銅鑪の打試みを爲す 益田家所蔵の6角銅鑪并に他の1銅鑪をも打試みて比較を爲したり やかて茶室に請して自ら濃茶を享せられたり 床は堺色紙公任梅の歌 茶碗は遠州蔵帳青井戸銘若菜 茶入唐物弦付 宗旦茶杓唐物瓢箪利休所持遠州名物なり 此莊付は初釜のものを出されとし見ゆ 鈍翁今年91歳 耳大に聾

したれと客を好みて該話娓娓として止まず 新獲の楽浪品など出して共に賞す

一、楽浪出土石製卮 漆卮 利^り王^に 王大ニ利ヨロシの文字朱字也

一、花鳥文銅洗 花は唐草にして鍍金なり、鳥も全し唐草には周辺に片切彫を施しあり、後世の菱金彫に同し此器は六朝か唐の物なるへし、此時代の物にして片切あるは初見とす

一、人面四脚 遊環付 残56切ありて復原し得し

長座して遂に夕食をも享せられて6時20分小田原発にて帰京す (十三松堂日記)

正木直彦は誠に淡々とした調子で十三松堂日記をのししている。しかし、この1尺8寸の銅鑪は安太郎が畢生の大作で思い出も多く、印象は強烈である。

「1月24日、銅鑪をたずさえ東京へむかった。しかし心中では“今遠州”といわれるほどの茶人鈍翁のお気に召すかどうか。万一最悪の場合を考えねばならない。駅へ見送りにきた妻にひそかに最後の別れを送った。

東京へつき、さっそく正木氏に、おほめの言葉をいただいた銅鑪を持って、26日の早朝、小田原の益田家掃雲台へむかった」といっているが、この26日早朝というのは十三松堂日記に「1月27日午前10時半東京駅発にて魚住安太郎に大銅鑪を携へしめて小田原益田邸に赴く…」とあり、27日のあやまりであろう。

さらにつづけて「鈍翁は正木氏と私の前で長い時間、試打されたあと、ひと言「よろしいな」といわれたが、そのあと所蔵の南蛮渡来の銅鑪4点をとり出された」というが、この日鈍翁は所蔵の銅鑪2点をとり出し比較されたので、十三松堂日記には「益田家所蔵の6角銅鑪并に他の1銅鑪をも打試みて比較を爲したり」と書いてある。

正木直彦は几帳面な人で、十三松堂日記は誠に克明に記されており、信頼度は高い。安太郎は翌日再び益田家を1人で訪れており、その時は益田家所蔵の4点とその外2点がおのおの比較された。

「私の銅鑪と比較すると、私にとっては問題にならないものばかり。わくわくする胸を押えて鈍翁のことばを待ったが、一向に話は銅鑪にふれず、

ごちそうがだされるばかりだった。

たまりかねたのか正木氏が「ところで…」と質問すると鈍翁は平然として「あの銅鑪はお茶に使えない」といわれた。

瞬間、私はさっと背筋に氷が走るようなつめたいものを感じ、顔までも、血の気がひいていく思いだった。正木氏も青い顔をして、じっとうつむいて思案しているようす。

鈍翁は静かに「作品は気にいらぬが長い間、費用をかけ苦心して制作したことは存じている。費用は払うから持ち帰るように」「おことばありがとうございます、銅鑪がお気に召してお納めしたときはお金を頂きますが、それ以外は1銭も頂けません」

するとこんどは執事が私を呼んで「旅費にするように」と100円札で厚さ2センチほど、約

5,000円を差し出した。しかしすでに私の心は定まっていた。金は1銭なりとも頂けないのである。

がふと、私は銅鑪を最初に試打した折り、鈍翁が時計をみながら「20秒なりますな」といわれたことを思いだした。ハッとする思いであった。実際は1分16秒—鈍翁はその4分の1の長さを言われたのである。

「鈍翁はお耳が遠いのではなかろうか。そのため？ 尺8という大銅鑪は低音律になる。かえって小径のものが高音で、聞きとりやすかったのではないか」と思いあたったのだった。となると矢もたでもとまらず翌27日（28日であろう）正木氏が持っておられた尺2寸の私作の銅鑪を借り、ひとりで再度掃雲台を訪れた。安太郎は翌日正木氏所持の銅鑪を借り、再び鈍翁を訪れたと云っているが、正木直彦は日記によれば、当時すでに昭和10年10月4日確かに安太郎作1尺2寸の銅鑪を入手している。しかし、安太郎にその銅鑪をこの27・8日に借した云々ということは日記に全く記されておらず、不思議である。

「私が伺う前にすでに品川の益田邸から、さらに2点の銅鑪がとり寄せてあり、その席へ横井半三郎氏（王子製紙会社顧問）がさきごろ日本橋浜町の古物商から入手したという私の前作、尺3寸の銅鑪を持参してあった。尺3の銅鑪は私の2年前のもの。会心の作品のひとつで、こんな場所

で思いがけずめぐりあったことは実になつかしくうれしかった。

これらの銅鑪を半日以上も熱心に試していた鈍翁はやがて横井氏の尺3の銅鑪が1番と折り紙をつけられ、箱書きもされたが、そのときはじめてそれが私魚住のものと知り、称賛と、改めて尺3,2点の注文があった。ここでどうにか私の面目が立たというものである。しかし、何か心にわだかまり、釈然としない私は2日間というもの、つめたい風の吹きすさぶ東京の町を酔い歩いたものだった。』

昭和12年1月29日 雨 午前10時魚住安太郎を伴ひ団男爵邸を訪ひ日本一と称せられる、銅鑪の拝見拜聴を爲す後室と仰木魯堂接待せられて十分に鑑賞す 此銅鑪は灰屋紹益所持 夫より冬木に傳はり益田英作より團家に傳はりたる時は48,000円なりきといふ 成程よき銅鑪なりき 邸園国宝の朝鮮石塔を賞観し午餐をいたゝきて退出す (十三松堂日記)

安太郎の思い出は、さらにつづき「29日、正木氏の案内で団琢磨男爵所蔵の銅鑪を拜見のため団を訪問した。そのおり、正木氏が尺八銅鑪が益田家に納まらなかったことを話すと、団男爵は即座に「私がいただこう」とすぐ使いを宿舎にさしむけた。話がまとまり価格をたずねられたので、「益田家は3,000円で納めるつもりだったのでこちらには2,500円で結構です」と答え、明朝9時、團家へ持参することにした。

しかしこのすぐこのあと、骨董商「山澄」から「実は横井氏が尺8銅鑪をぜひ手に入れたい。どんなことがあっても譲ってもらいたい」といっているとのこと。すでに團家との話がまとまったことをつげたが「ごもっともだが、実は横井氏は益田家があの銅鑪を買わないときめたとき、よし私の手に入れようと決心したが、益田家で直接あなたに申し入れるのは鈍翁に対する礼儀もあってできかね、翌日すぐ、依頼があったのだ」といい、かさねて「魚住さん、あのとき鈍翁から尺3銅鑪2面の注文があったのは横井氏のおかげもあったのではないかと熱心にいう。

考えれば私も横井氏へ納めるのが因縁のような気もし、山澄の顔を立てておけば、将来、せがれ

の幸平も作品の上で何かと役に立つこともあろうと承諾してしまった。

価格は団家への納入価格より700円値引きして1,800円と定め、すぐ団家へ事情を伝え、承諾してくれ、銅鑪は結局横井家へ納まった。

思えば事の多い銅鑪であった。

制作にかかる前に鈍翁に1度お目にかかっていたなら…鈍翁に会わずに制作を引き受けたのは、なんといっても一代の不明であったと後悔されてならなかった。

この生死をかけた銅鑪をいざ手放すとなると、そのさびしさはたえようもなく、それから3日間というもの、東京中をひとり飲みまわった。

安太郎は帰沢し、いつごろから鈍翁より改めて注文された銅鑪の制作にかかったのであろうか、さすがの安太郎も、しばらくは銅鑪の制作にかかる気がせず銅鑪以外のものを作っていたのかもしれない。十三松堂日記に次のような記事がある。

昭和12年3月19日 魚住安太郎金沢より来 二重青海盆を持贈 甚好

しかし、やがて6月には鈍翁注文の銅鑪が完成した。安太郎は、さっそく銅鑪を益田家に納めるため上京したが、その時鈍翁より更に1尺5寸の銅鑪を注文された。十三松堂日記は次のように記している。

昭和12年6月12日 加賀の魚住安太郎夫妻来訪 益田鈍翁注文の鑪出来に付持参したるに好評にて今度は更に尺6寸のものをと注文せられ少し當惑の気味に見えたり 家蔵のパイと鎌倉彫の把手を自製して持参したり、安太郎は当時を回想しながら「約半年後、鈍翁注文の尺3銅鑪2面が仕上がったので再び鈍翁にお目にかかったが、こんどは非常にお気に召したようだった。その席上、鈍翁夫人に尺8の銅鑪を…と注文され、その意外のことばにびっくりしてしまった。

6カ月前「尺8はお茶に使えない」とはっきりいって私を絶望させ、私はその一言で打ちのめされ、大寒の風が身にしむ東京の町を、憤怒と絶望に身をもみ、宿なし犬のように腹ばわせた同じ人が、その尺8銅鑪をもう1度作れというのだ。

夫人の目をじっとみながら、私は鈍翁の心中が察せられてならなかった。

「お茶には使えぬ」と返した銅鑼が、今は茶人好事家の間で名作といわれるにおよんで、鈍翁は茶人としての面目を保たせるため今1度、同じ作品を…と今度は夫人に頼ませたのだろう。

「尺8は2度と益田家へは納めません。わけは申さずともおわかりのことと存じます」静かにいいながらも、私の心は激しくしてくる。勝利感と作者としての意地。

しらけきった座をとりなすように夫人は「お気持ち、よくわかりました。では改めて尺8と尺3のなかをとって尺5銅鑼を」といわれ「尺5なら」とひきうけたところ、ご夫妻ともよろこばれ鈍翁は私に「号をつけよう」と「爲楽」と書かれた。

この号は、私の銅鑼の響きから涅槃経の「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅爲楽」からとったものであった。

鈍翁はそれから2年後、死去された。

以上が安太郎の生涯における最も思い出の多い大作1尺8寸の銅鑼にまつわる話であるが、最後に安太郎が鈍翁から注文された銅鑼を十三松堂日記は尺6となっているが、これは尺5が正しいように思われる。

後年、安太郎は尺6の銅鑼の傑作を何点か作っているが、この当時はまだ尺6の銅鑼は作った経験がなく、尺8の銅鑼の因縁もあり尺5ならということになったのではなかろうか。

なお、「ききがき抄」は1尺8寸の銅鑼の思出ばなしの締くくりを『ところであの尺8銅鑼はそのご「山澄」から鈍翁に依頼して「雲ノ井」の銘をつけられ、畠山一清氏のあっせんで裏千家家元へ納められた。

1分16秒という余りにも長い“引き”のため「途中でなんとかとめられないか」といわれたという笑えぬ話もあったとか。今もなお、美しい音色を響かせていることであろう」と結でいる。

安太郎は益田鈍翁から製作を依頼されたのは、銅鑼だけではなくたようで、十三松堂日記に

「昭和13年4月2日午前魚住安太郎 益田鈍翁に注文有楽所持五芽三象古銅花入の写に苦心せりとて功程過半なるを携へ示す 佐波利製なるよし也」とある。この日、正木直彦は出張で丁度来沢しており、益田鈍翁の依頼品なので、安太郎は未完成

品であるが、わざわざお見せしたものと思われる。しかし、この作品は鈍翁生前にはついに完成させることができなかった。

十三松堂日記に「昭和14年11月26日 朝加賀より魚住爲楽益田鈍翁委嘱の三象花器を仕上げて出来栄を見せんと携示す「誠に上々の出来なり 益田翁生前に見せ得たならはと残念かる」と書かれている。

この作品を完成するのに、少なくとも19カ月以上もかかっているのは、この間に安太郎にとっては、まさに晴天の霹靂のような法隆寺の夢殿の大修理に技術者として従事するということがあったためである。

それは、安太郎がまだ若年のころ家業の桶職で修練した木工技術がかわれ、正木直彦から依頼され鋸の技術を駆使して、救世観音菩薩を安置する厨子の本地仕上げをするという仕事であった。

安太郎は、見事にこの仕事をなしとげた。しかし、この修理事業への参加は、銅鑼師魚住安太郎の生涯を通観するとき、はからずも前期と後期の区切りとなった。(未完)